

稲畑汀子の滑稽俳句（1）

小西昭夫

稲畑汀子さん（以下敬称略）は、二〇二二年二月十七日九十一歳で天寿を全うされた。死後、『稲畑汀子俳句集成』が刊行されたが、そこには五三九八句が収録されている。ぼくが注目しているのは、そこに収録された未刊句集『風の庭』である。

稲畑汀子といえば、「ホトトギス」の三代目主宰として虚子以来の「花鳥諷詠」と「客観写生」の道を歩まれた方であり、ご自身の句集のあとがきには、必ずとっていい程、花鳥諷詠と客観写生に触れられている。それを伝統俳句の王道と認識し、少しでもいい句を作り選句でもその王道を絶対に踏み外さないようにと心掛けていらっしやったのである。

『風の庭』は、汀子自身が選句し「あとがき」も書いているのだが、汀子の生前には間に合わず、未完句集として、『稲畑汀子俳句集成』に収録されたものである。

この句集の特徴は、今迄の句集と違ってユーモラスな句が多いことである。『風の庭』は、ページをめくるたびに滑稽句に出会うといってもいいくらいユーモアに溢れている。それらの句を少し紹介したい。

子育ての真最中のさくらんぼ

子育ての真最中は忙しい。でも、さくらんぼはちょっとつまむ。この「さくらんぼ」への着地が笑える。子育ての真っ最中でも腹は減る。美味しいものも食べたい。ましてさくらんぼなら尚更である。さくらんぼは子育ての大きな力になるのだ。人間の真理を軽やかに描きながら、嫌味なく笑える句である。

「さくらんぼ」にはもう一つ面白い句がある。

目の前の眼鏡探してさくらんぼ

上五中七は、あるある感満載で自分の経験に合わせて誰もが笑みを浮かべるだろう。もし、この句が「目の前の眼鏡探して見つからず」だったとしたら、確かに滑稽感はあるだろうが、面白さは半減する。この句の場合も下五の「さくらんぼ」への着地が輝いている。眼鏡探しは後回しにして、まず「さくらんぼ」を食べようというのだ。眼鏡はそのうち出てくるだろう。可笑しい。

子子といふ字も動き出しさうに

漢字は象形文字だが、この「子子」という字は実によくできていると感心する。夏に汲み置きの水を庭に置いておくとあつという間に子子が湧き、底から浮き上がり、また沈み、又浮き上がる。まさにこの文字が、「ぼうふら」を写生した感じである。その思いを率直に句にしたのだが、文字が動き出すことなどない。その文字が動き出しそうだとするところに滑稽感がある。

林檎剥くときも彼女の几帳面

人間の性格ってこんな細部にも出て来るんだ。これが「林檎剥くときも彼女の大雑把」だったらこの可笑しさは出ないだろう。でも、林檎を食べるのなら、大雑把に剥かれた林檎よりは几帳面に剥かれた林檎がいい。